



A decorative border with floral motifs and scrollwork surrounds the text.

新潮日本古典集成

太平記

一

山下宏明 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第一五回)

太平記 一



定価一九〇〇円

昭和五十二年十一月五日 印刷  
昭和五十二年十一月十日 発行

校注者 山下宏明

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一  
電話 東京 03 (六六) 五一二 (業務)  
東京 03 (二六六) 五四二 (編集)  
振替 東京 四 八〇八

装画 佐多芳郎  
組版 シーティエス大日本  
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例 ..... 七

卷第一 ..... 一三

序 ..... 一五

後醍醐天皇御治世の事付けたり武家繁昌の事 ..... 一六

関所停止の事 ..... 二〇

立后の事付けたり三位殿御局の事 ..... 二三

儲王の御事 ..... 二四

中宮御産御祈りの事付けたり俊基偽つて籠居の事 ..... 二七

無礼講の事付けたり玄恵文談の事 ..... 二九

頼員回忠の事 ..... 三五

資朝・俊基関東下向の事付けたり御告文の事 ..... 三〇

卷第二 ..... 四九

南都・北嶺行幸の事 ..... 五

卷

第 三

僧徒六波羅へ召し捕る事付けたり為明詠歌の事…………… 四

三人の僧徒関東下向の事…………… 五

俊基朝臣再び関東下向の事…………… 六

長崎新左衛門尉意見の事付けたり阿新殿の事…………… 六

俊基誅せらるる事ならびに助光が事…………… 七

天下怪異の事…………… 八

師賢登山の事付けたり唐崎浜合戦の事…………… 九

持明院殿六波羅へ御幸の事…………… 一〇

主上臨幸実事に非ざるに依つて山門変儀の事付けたり紀信が事…………… 一〇

卷

第 四

主上御夢の事付けたり楠が事…………… 一一

笠置軍の事付けたり陶山・小見山夜討の事…………… 一五

主上笠置を御没落の事…………… 一六

赤坂の城軍の事…………… 一八

桜山自害の事…………… 一九

笠置の囚人死罪流刑の事付けたり藤房卿の事…………… 二五

八歳の宮御歌の事	一六三
一宮ならびに妙法院二品親王の御事	一六六
俊明極参内の事	一六九
中宮御歎きの事	一七一
先帝遷幸の事	一七三
備後三郎高德が事付けたり呉・越軍の事	一七五
第五	二〇五
持明院殿御即位の事	二〇七
宣房卿二君奉公の事	二〇八
中堂新常燈消ゆる事	二一一
相模入道田楽をもてあそびならびに鬨犬の事	二一二
時政榎島に参籠の事	二二七
大塔宮熊野落ちの事	二二九
第六	二四三
民部卿三位局御夢想の事	二四五
楠天王寺に出張の事付けたり隅田・高橋ならびに宇都宮が事	二四九
正成天王寺の未来記披見の事	二六三

卷

第七

赤松入道円心に大塔宮の令旨を賜ふ事 ..... 二六五  
関東の大勢上洛の事 ..... 二六七  
赤坂合戦の事付けたり人見・本間拔懸けの事 ..... 二七一

卷

第八

摩耶合戦の事付けたり酒部・瀬川合戦の事 ..... 三三五  
三月十二日合戦の事 ..... 三四一  
持明院殿六波羅に行幸の事 ..... 三四七  
禁裡仙洞御修法の事付けたり山崎合戦の事 ..... 三五五  
山徒京都に寄する事 ..... 三六〇

四月三日合戦の事付けたり妻鹿孫三郎勇力の事	三六六
主上みづから金輪の法を修せしめたまふ事付けたり千種殿京合戦の事	三七七
谷堂炎上の事	三六六

解 説	三九一
付 録	

太平記年表	四四四
系 図	四三六
地 図	四四二





## 凡 例

一、南北朝期動乱の中で書き続けられた『太平記』は、物語僧によって語られる一方、動乱の体験者やその関係者らの要請をも受けて加筆や省略が行われ、複雑な変化を続けた。室町時代に入って宮中の貴紳や寺院の僧侶（おとうりよ）などの手により写され、読まれ（音読を含む）ることも多く、数々の異本を生じたものと思われる。江戸時代に入り、古典刊行の機運の中で、『太平記』も流布本としての形を完成する。本書の底本には、その慶長八年古活字本を用いた。慶長十年古活字本・寛永版本を以って校訂を加え、その部分については頭注にことわった。

一、底本は、漢字・片仮名交じりで、時に漢文表記を交えるが、本書では、これを読みやすくするため、およそ次の方針に従って改めた。

\* 片仮名を平仮名に改め、漢文表記は読みくです。ただし、文中に引用される漢詩・偈（げ）の類は、作品の効果を考慮して原文の表記を残す。

\* 現代国語における仮名書きの基準に従い、感動詞・代名詞・接続詞・副詞・助詞・助動詞などの多くは、仮名書きに改める。

\* 仮名づかいは、歴史的仮名づかいにより統一する。

\* 送り仮名は、原則として新送り仮名の方針に従う。

\* 漢字・仮名の表記は、通行の表記による。なお底本には、あて字が見られるほか、「剋」と「刻」、「責」と「攻」、「甲」と「胃」など、同じ語でありながら表記の不統一がしばしば見られるが、つとめて通行の表記に統一する。

\* 読みは、原則として寛永無刊記整版本の振り仮名に従うが、清濁など現代の読みと異なる語、訓読みと音読みの区別を示すべき語、それに人名・地名・年号・官名など、必要に応じて読みを補い、いづれも歴史的仮名づかいによって示す。

\* 音便は、寛永版本に表記のあるものはそれに従い、表記のないものは『平家物語』の語りを参照して適宜判断した。

\* くりかえし符号は、漢字一字をくりかえす場合の「々」を用いるにとどめる。

\* 本文に、適宜、句読点や会話の「」、段落をほどこす。

一、傍注（色刷り）は、本文の読解を助けるため、簡潔に現代語訳を行ったものである。なお、主語や接続詞などは「」で、補足説明は（ ）でくくって示した。ただし、スペースの都合で、傍注とすべきものを頭注に移した場合もある。

一、頭注では、人名・事項の説明や解釈、本文の校異、傍注の補足、論旨の説明などを行った。また、各章段もしくは段落の内容について、\*印を付して簡単な説明を加えた。なお色刷りで、適宜小見出しをつけた。

一、作品の構成の理解を助けるため、各巻頭に所収年代とその内容を略述した。

一、本巻巻末の解説では、『太平記』を理解する上に必要と思われる作者・成立・諸本など基礎的な

書誌事項を記すにとどめ、校注者の「太平記論」は最終巻に載せる。なお、付録として、年表、系図、地図を収めた。

一、本書の校注を行うにあたり、古くは『参考太平記』『太平記抄』『太平記考証』など江戸時代の注釈をはじめ、新しくは佐伯常麿・永積安明・後藤丹治・釜田喜三郎・岡見正雄・高橋貞一・市古貞次・大曾根章介・山崎正和・青木晃・長谷川端・増田欣の諸氏の注釈・テキスト・口語訳・研究から学恩を受けた。一々ことわらないが、ここに記して感謝する。

一、貴重な御蔵書の利用をお許しくくださった横山重氏（慶長八年・十年両古活字本）および長谷川端氏（寛永版本）にお礼を申し上げる。なお、本文の作成に、今井正之助・長坂成行両氏の協力をえたことを申しそえる。



太平記一



太平記 卷第一



## 卷第一の所収年代と内容

◇元亨元年（一二三二）の頃から、正中の変が一応の落着を見る正中二年（一二三五）の頃まで。

◇儒教的政道論をよりどころに、北条高時の暴虐、これに対する後醍醐天皇の善政を記し、天皇親政再興への行動開始を正中の変として描く。その作者の儒教的政道論は確固としたもので、一応は天皇の治政を天の意にかなう正当なものとなしながらも、現実の後醍醐天皇については、その武断に走りかちな狭量さとその後宮の乱れを指摘し、さらにその側近の頽廢をも指摘する。作者の目は、単に関東に対する後醍醐天皇の対立ということを超えて、さらに広い治政論に徹している。その思想のよりどころを示すが冒頭の序である。